興福寺旧境内の調査

－第539次

1　はじめに

本調査地は東向商店街の入口にあり、平城京左京三条六坊十四坪の東北隅に位置する。『興福寺流記』によれば、左京三条六坊十三～十六坪は天平宝字年間に興福寺へと施入され、果薗・園地があったとされる。しかし、左京三条六坊十四坪における古代の様相はあきらかではない。ただし、本調査区から約50m北に位置する第467次調査では奈良時代の南北溝SD9450を（『紀要 2011』）、約180m北に位置する第439次調査でも奈良時代の南北溝SD9300を検出しており（『紀要 2009』）、両者は平城京東六坊大路西側溝の可能性が指摘されている。しかし、SD9450はY－15,683付近、SD9300はY－15,668付近と位置は異なり、いずれも小規模調査であったため、結論は保留されている。特に、SD9300は本調査区の北延長部に位置する。

調査はビル改築にともなうものであり、調査面積は約50㎡である。発掘調査期間は2014年９月16日に開始し、同年10月２日に終了した。

2　基本層序と検出遺構

基本層序

調査区は、後世の開発で北半が大きく削平されている。調査区南半では、厚さ約0.6mの造成土を掘り下げると地山（明黄褐色砂質土）が露出する。遺構は埋甕SJ10550を大土坑SK10545の上面で検出したほかは、すべて地山直上で検出した。地山面の標高は、約83.20mである。

検出遺構

検出した主な遺構は、土坑６基、埋甕１基等であり、すべて中世から近世にかけてのものである（図291）。調査区西部は東六坊大路西側溝の可能性があるSD9300の南延長に位置するが、古代の遺構は確認できなかった。

大土坑SK10545　東西3.2m以上、南北5.2m以上、深さ約0.7mの大型土坑。埋土からは奈良時代から室町時代を中心とする大量の瓦磚類および少量の土器が出土した。また、掘方が方形を呈すことや底面が平坦なことを勘案すれば、周辺を整備するための地業であった可能性も考えられる。

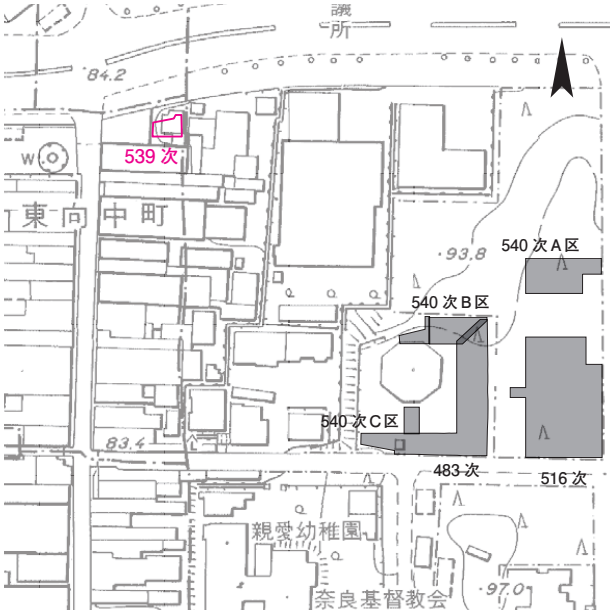

図290　第539次調査区位置図　1：2500

大土坑SK10546　東西3.3m以上、南北3.1m以上、深さ約30㎝の大型土坑である。SK10545と同様の性格をもつとみられ、埋土からは奈良時代から室町時代までの大量の瓦磚類および少量の土器類が出土した。重複関係からSK10545に先行する。後述するSK10547に壊される。

廃棄土坑SK10547　調査区東南部で検出した。東西約2.1m、南北約3.0m、深さ約1.8m。西北隅には土坑から脱出するための足かけ穴が残る。埋土からは奈良時代から近世までの大量の瓦、土器類、木製品、種実類等が出土した。不要品を捨て込んだいわゆるゴミ穴と考えられる。出土遺物は、土器の年代からおおよそ元和年間（1615～24）に位置づけられることが可能な一括資料である。

廃棄土坑SK10548　調査区東辺で検出した。東西1.8m、南北0.5m以上、深さ約1.2m。SK10547と同じく17世紀前半のゴミ穴と考えられ、大量の瓦、陶磁器片、および漆器片、木製品、種実類が出土した。

土坑SK10551　調査区中央部やや東寄りで検出した。直径0.9m以上、深さ約20㎝。SK10545・10546を掘り込んでおり、西北は削平を受けている。

土坑SK10549　調査区西北部で検出した。直径は約1.2m、深さは約30㎝である。SK10549の埋土からは中世の瓦が少量出土した。

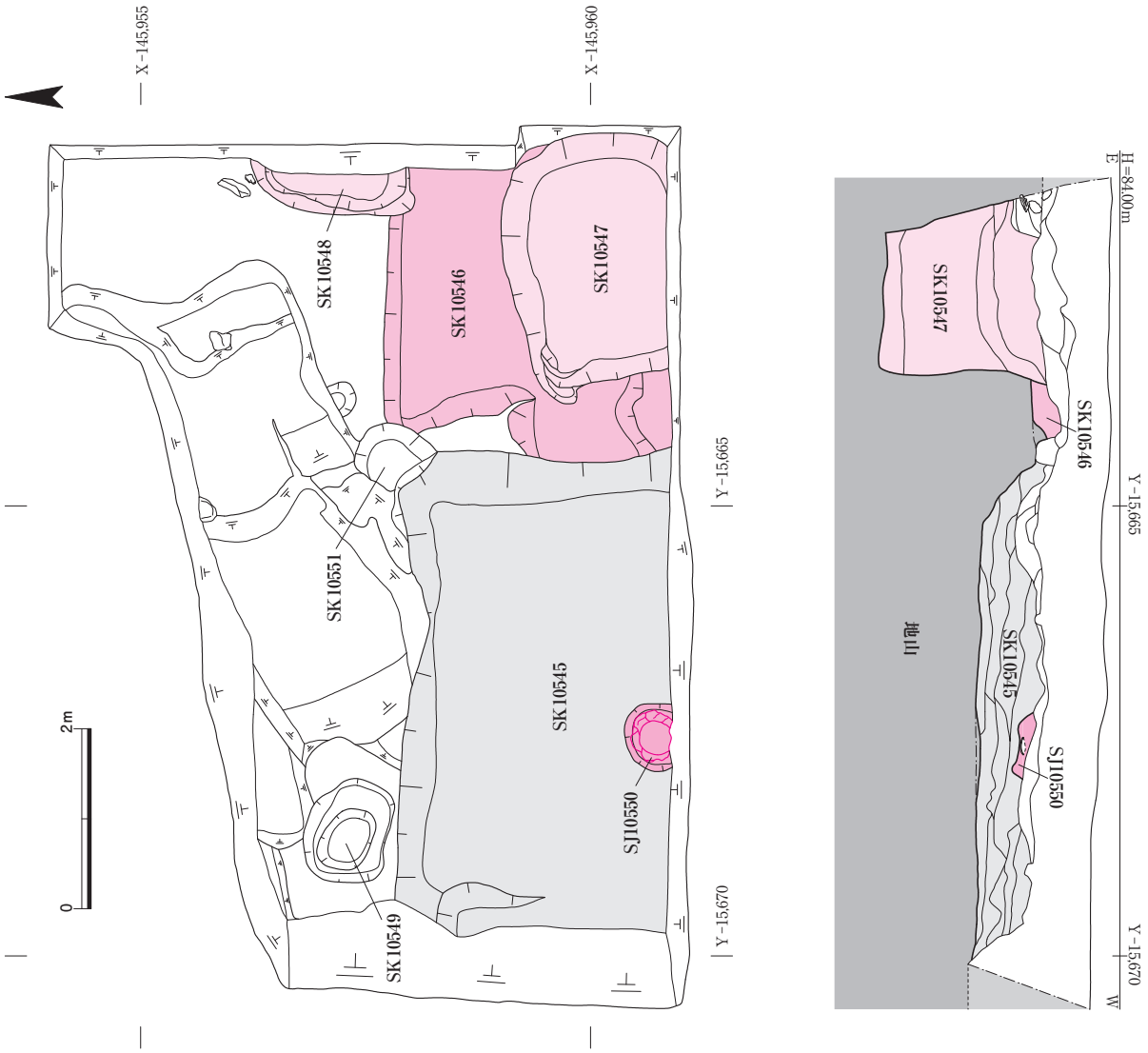

図291　第539次調査区遺構図・南壁土層図　1：80

図292　第539次調査区全景（西から）

埋甕SJ10550　調査区南辺中央で検出した。直径約0.7m、深さ約15cm。SK10545を掘り込んで据えられており、上部は削平されている。甕の底部径は約30cm。埋甕は近世の瓦質土器である。

3　出土遺物

瓦 磚 類

本調査区からは奈良時代から近世までの大量の瓦磚類が出土した（表38）。出土した瓦磚類は中世の瓦が中心だが、奈良時代や平安時代の瓦も一定量含まれる。特にSK10545埋土には大量の瓦が含まれていた。ここでは主要な軒瓦を報告する（図293）。

１～８は軒丸瓦。１は6301Ａ。奈良時代初頭の興福寺創建瓦。２は6235J。奈良時代後半で、東大寺式の文様構成をもつ興福寺所用瓦である。３～５は中世の「興福

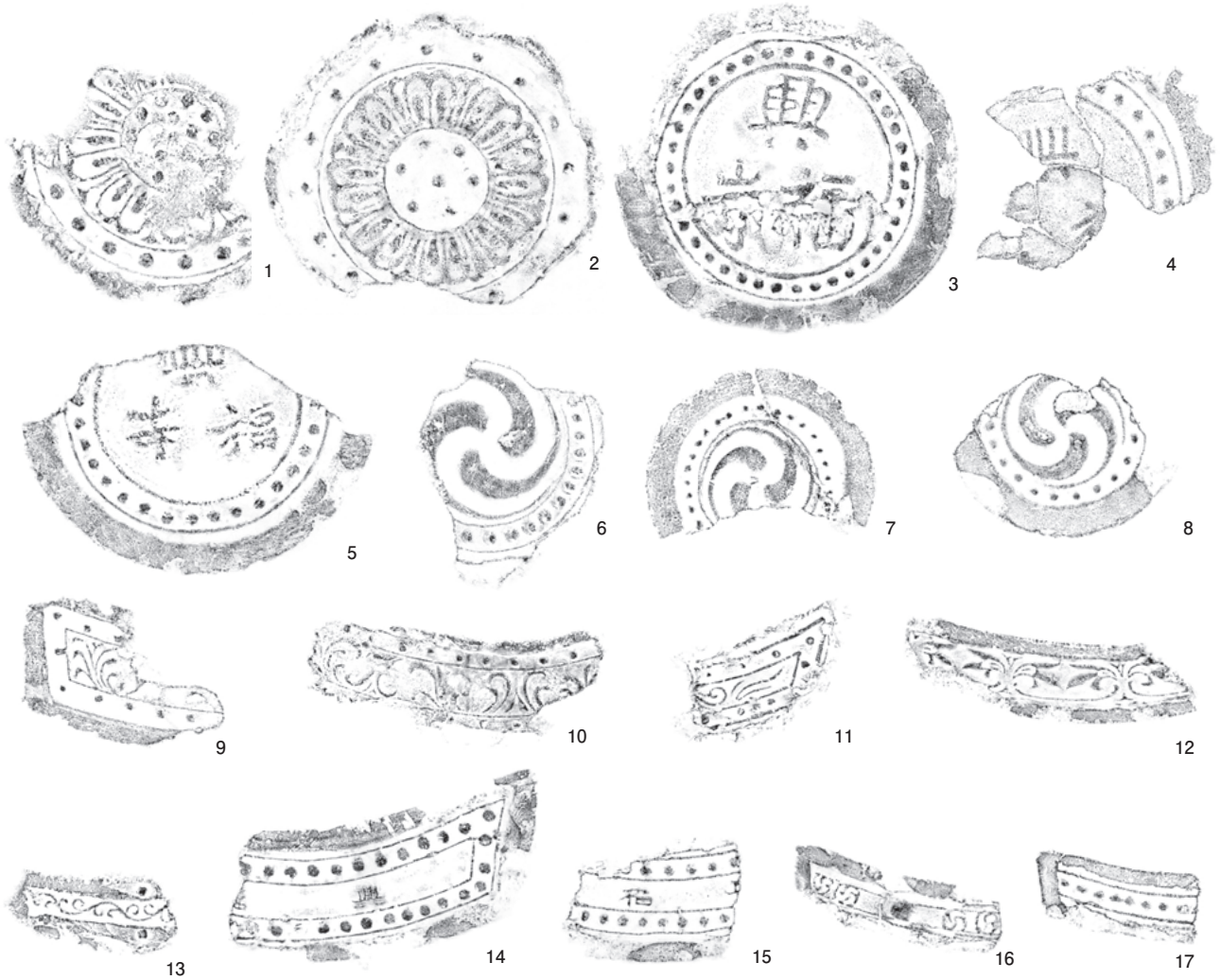

図293　第539次調査出土軒瓦　1：4

寺」銘軒丸瓦。３は鎌倉時代のもので興福寺食堂で出土例がある。４・５はそれぞれ笵が異なるが、「興福寺」銘軒丸瓦のなかではこれまでに出土例がない。両者の詳細な時期は不明だが、３と比べ瓦当に対して字がやや小ぶりで、室町時代の「興福寺」銘軒丸瓦の特徴に似る。６～８は巴文軒丸瓦。６・７は左三巴文軒丸瓦。６は平安時代末から鎌倉時代。７は鎌倉時代。８は右三巴文軒丸瓦。鎌倉時代。

９～17は軒平瓦。９・10は奈良時代後半の6739Ａ。西隆寺と同笵である。11は均整唐草文軒平瓦。食堂の調査で出土例がある。平安時代前期。12は外縁が素文で内区にはパルメットが等間隔で配される。平安時代。13は左偏行唐草文軒平瓦。外区上面に珠文が疎らに配される。平安時代後期。興福寺食堂の調査で出土例がある。14・15は「興福寺」銘軒平瓦。両者は異笵で15のほうがやや小ぶりである。いずれも鎌倉時代のもので興福寺食堂の調査で出土例がある。16は内区に右三巴文を配す。鎌倉時代。17は内区に珠文を配す。室町時代。興福寺食堂の調査で出土例がある。

なお、出土位置に関しては、１が廃棄土坑SK10548出土。２～６、８～12、14・15・17が大土坑SK10545出土。13が廃棄土坑SK10547出土。７・16が表土からの出土である。

本調査出土の瓦磚類は、6301Aや「興福寺」銘軒瓦が示すように興福寺所用瓦である。これらは本調査区の位置からも興福寺の築地等に使われていたものの可能性があるが、軒瓦型式にまとまりがなく断定はできない。

（石田由紀子）

表38　第539次調査出土瓦磚類一覧

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6235	J	2	6671	L	1	丸瓦（ヘラ書）	2
6301	A	3		?	1	平瓦（刻印）	1
古代		3	6682	?	1	（タタキ）	1
平安		3	6739	A	2	面戸瓦	7
中世		20	古代		3	小型面戸瓦？	1
（「興福寺」銘）		9	平安		8	割面戸瓦？	1
巴（中世）		9	中世		29	割熨斗瓦	1
（中近世）		2	（「興福寺」銘）		16	隅木蓋	3
（近世）		5	中近世		2	雁振瓦	4
近世		1	近世		1	目板瓦	3
時代不明		6	時代不明		2		
軒丸瓦計		63	軒平瓦計		66	その他計	24

	丸瓦	平瓦	凝灰岩	レンガ
重量	562.888kg	1244.19kg	0.263kg	0.095kg
点数	2810	8386	5	1

土器類

整理用コンテナに17箱分の土器・陶磁器が出土した。大半が廃棄土坑SK10547・10548と大土坑SK10545・10546からの出土である。SK10545・10546出土品には、平安時代に遡る土師器や灰釉陶器もわずかに含まれるが、多くは13世紀以降のものとみられる赤味の強い胎土の土師器皿で、14世紀半ば以降に出現するとされる白色系胎土の土師器皿も少量確認できる。したがって、概ね室町時代の遺物と目されるが、全般的に細片化しており、元来は先行する時期の遺構などに含まれていたものと考えられる。以下、ほぼ同時期であるSK10547・10548のうち、出土量の多いSK10548最下層出土分について報告する（図294）。

１～29は土師器皿。内面に凹線状の圏線を有する29は、その特徴から京都近郊産と考えられ、この土器群の中では異質な存在である。その他の土師器皿は、南都（奈良）の遺跡に通有のもので、胎土の色調から２群に大別できる。胎土が赤褐色を呈する一群（１～８）は、口径８㎝前後のもののみで構成されており、目立った法量分化は認められない。これに対して、にぶい黄橙褐色を呈する一群（９～28）には、口径７㎝前後の小型品から口径12.5㎝前後の大型品まであり、法量的に４ないし５群に分化するとみられる。口径の大小を問わず、口縁部には油煙の付着が認められるもの（７・17・19・20）が少なからずあり、灯明皿として使用されたと考えられる。

30～38は美濃焼の施釉陶器。図示した灰釉内禿皿（30）・灰釉折縁皿（31）・長石釉小杯（32）・長石釉碗（33）・灰釉碗（34・35）・長石釉小鉢（36）・鉄釉天目茶碗（37）・鉄釉肩衝茶入（38）のほか、長石釉丸皿や全体の形状は不明だが織部焼の把手などがある。多種多様な器形が認められる一方で、後述する唐津焼と比べると量的には少なく、概して破片が小型化している。

39～46は唐津焼と俗称される肥前地域産の施釉陶器で、皿（39～41）・碗（42～45）・向付（46）のほか、図示しなかったが徳利・片口鉢・大平鉢がある。多くは土灰釉がかけられただけのものであるが、釉下に鉄絵が施されたいわゆる絵唐津（45・46）も少数認められる。美濃焼と比べると、器形的な多様性は乏しいが、量的には圧倒的に多数を占めており、概して破片も大型である。

47・48は備前焼の焼締陶器である。47の内面には擂り目状の櫛描波状文が認められるが、擂鉢としての使用痕跡（摩耗）は確認できない。擂鉢としては異例の小型品であることを勘案するならば、茶道具の擂盆水指として製作・使用されたものと考えられる。48は徳利とみられる袋物の底部片で、底裏に千鳥風の文様と「浄光□」の文字が墨書されている。出土地点の性格から、「浄光」とは興福寺僧の名ではないかと考えられ、判読できない３文字目を花押とみなしても良さそうであるが、断定は避けておく。

49・50は信楽焼の焼締陶器。49には６本、50には５本を１単位とする擂り目が施されており、いずれにも擂鉢としての使用痕跡（摩耗）が認められる。

51～54は中国からの輸入磁器。52・53は青花磁器で、図示した以外にも小杯や漳州窯系の大型盤がある。53・54は白磁で、独特の象牙色を呈する54はその特徴から福建省の徳化窯産と目される。胴部下半しか残存していないが、観音立像であろう。

55は瓦質土器で、胴部外面に８弁の菊花形印花文が約2.5㎝間隔で施されている。瓦質土器には、図示した小型浅鉢のほかに擂鉢・灯消壺・甕などがある。

56は焼塩壺。印・銘は認められない。57は土師器羽釜の口縁部。58は土師器の焙烙。

この土器群の年代を推定する上で有力な手がかりとなるのは、前述の京都近郊産土師器皿（29）で、類品は元和６年（1620）の火災にともなう廃棄物処理土坑と考えられる上京遺跡・室町殿跡（京都市）１区土坑12および１区土坑65[1]から出土している。伴出の美濃焼・唐津

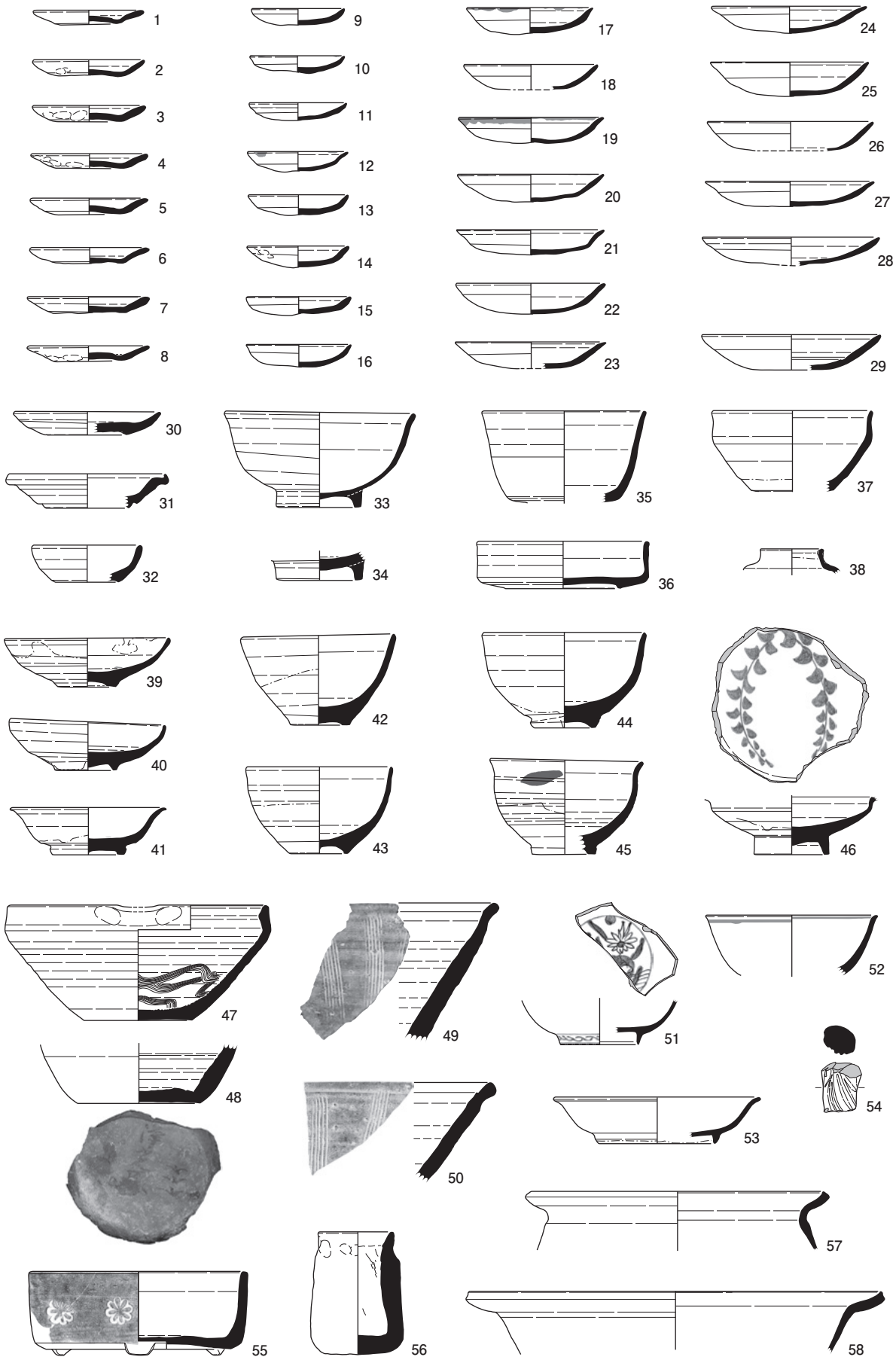

図294　第539次調査SK10547出土土器　1：4

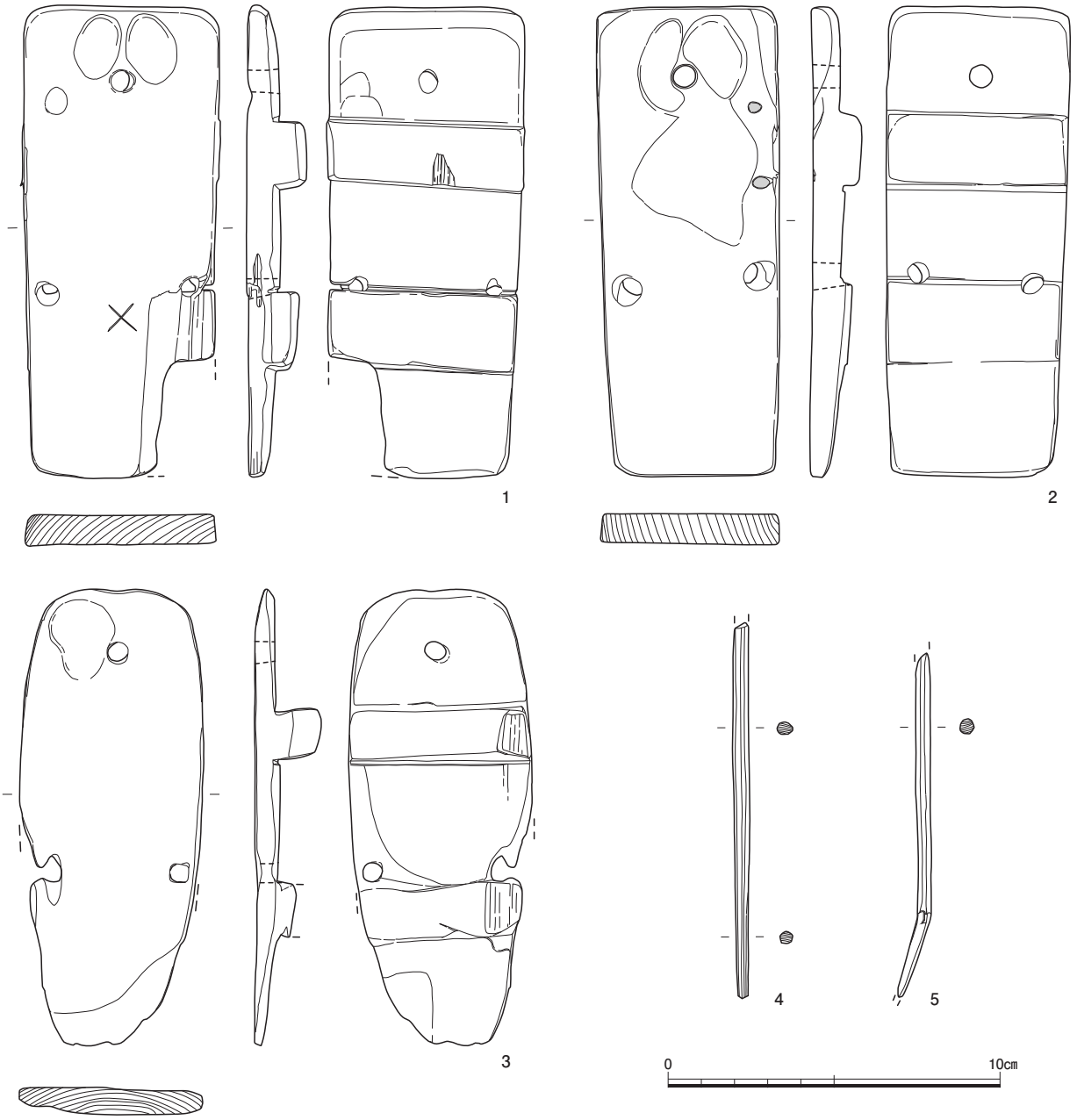

図295　第539次調査SK10547出土木製品　1：2

焼・信楽焼・焼塩壺・土師器焙烙についても、高い共通性をみいだせる個体が少なくなく、SK10548最下層出土品についても略同時期、すなわち元和年間（1615～24）頃のものと考えることが許されよう。　**（尾野善裕）**

木製品など

廃棄土坑SK10547からは、下駄９点、箸９点、折敷片１点、漆塗椀蓋１点、漆器片23点、結物桶部材28点、薄板６点、加工棒４点、織物片１点などが出土した。SK10547からは、下駄１点、箸14点、漆塗皿１点や漆塗椀１点、漆器片８点、ほかには結物桶部材や竹籠編物片などが出土している。

SK10547から出土した下駄はすべて台と歯を一木で作り出す連歯下駄で、前壺は前方中央に、後壺は後歯の前に穿孔されるタイプである（図295-１～３）。台裏には、歯を削り出す際の工具痕が溝状に残る。下駄の平面形態には長方形（５点）と楕円形（４点）の二者があるが、明確に１足として認識できるものはない。１は、足指の圧痕から左足用と想定される。後壺の中間には×印が刻ま

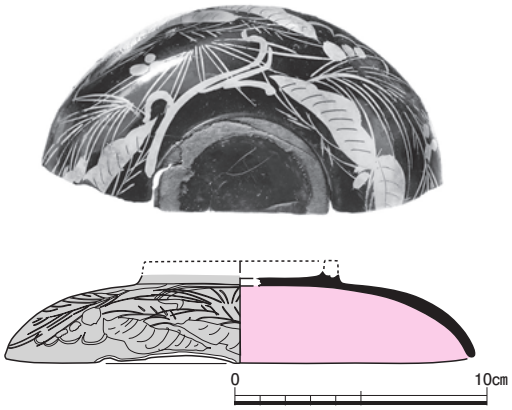

図296　第539次調査SK10547出土漆器　1：3

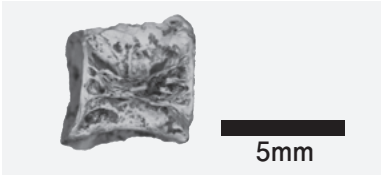

図297　第539次調査SK10547出土動物遺体（ウナギ属）

れており、個人のものと識別するための印と考えられる。台表の線刻については、大坂城跡出土の17世紀のものなどに類例がある。長21.5cm、幅9.0cm、厚2.7cm、板目材。２は全体的に残りがよいが、足の圧痕からは左右どちらであるか判断できない。長21.3cm、幅8.1cm、厚2.2cm、追柾目材。３は平面形態が楕円形で、台尻部分の腐食が激しい。残存長20.7cm、幅8.3cm、厚3.0cm、板目材。

４、５は箸である。４は残存長17.1cm、最大径0.7cm、断面は多角形で先端は径0.5cmとやや細くなる。５は残存長15.8cm、径0.7cmで、断面は多角形である。残りの７点は折損、または腐食している。図296は漆塗椀蓋で、外面は黒漆塗に赤漆で文様を描き、内面が赤漆塗である。外面全体に模様が描かれている点や厚みなどから蓋と判断した。復元径12.6cm、残存高2.45cm、厚0.3cm。

その他の漆器片には、「丸に一文字」の家紋や「丸に紅葉」紋が入る、内面赤漆、外面黒漆塗の破片がある。

また図化したもの以外に、結物桶の側板、底板（蓋板）、木栓、等の部材があるが、残りが悪く同一個体を識別できない。側板のうち、２枚には紐を通すための孔が２つずつある。長38.0cm、幅8.2cm、厚1.0cm。底板（蓋板）は、残存長23.3cm、残存幅15.8cm、厚1.2cm。

SK10548から出土した下駄１点には、鼻緒が遺存していた。前歯は削り出しているが、後歯は別材を木釘で留めており、後補とみられる。残存長20.0cm、幅8.3cm、厚3.5cm。

石 製 品

SK10547から、硯が４点、円板形石製品２点が出土した。硯は完形品のものはない。４点とも石材が異なるが、内幅のわかる３点は、同一幅である。使い減りが著しい。円板形石製品は直径3.1～3.2cm、厚みは0.8～0.9cm。

植物種実類

SK110547からは、メロン仲間、サンショウ、シソ属などの食用植物の種実が、SK10548からはカキノキ、シソ属、メロン仲間やハシバミの種実、クリの皮等も出土している。　**（浦　蓉子）**

動物遺体

SK10547から、ウナギ属の腹椎が１点出土した（図297）。骨は焼けており白色化していた。　**（山崎　健）**

４　ま と め

今回の調査では古代の遺構は確認できなかったものの、中世から近世初期にかけての興福寺に関連する土坑群を検出した。

廃棄土坑SK10547・10548から出土した多量の遺物はおおよそ元和年間（1615～24）に位置付けられる良好な一括資料群である。出土遺物は、陶磁器や土師器皿のほか、下駄、箸、漆器等、日常生活を示すものであり、当該期には調査区周辺が生活域であったことをうかがわせる。本調査地は、興福寺西面築地のすぐ西側にあたるが、近世の古絵図では築地の西側は東向通りまで空間地となっており、民家が建っていた様子はない。興福寺境内西辺は近世には興福寺の子院が建ち並んでおり、SK10547・10548出土遺物は子院で使用され、廃棄されたものの可能性がある。大土坑SK10545・10546で大量に廃棄された瓦磚類とあわせれば、室町時代以降、調査区周辺は大幅な改変がなされ、興福寺寺域西辺では子院が整備されていったと考えることも可能であろう。

以上のように、中世から近世初期にかけての興福寺に関連する重要な知見を得ることができた。　**（石田）**

註

１）京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-8上京遺跡・室町遺跡』2014。